

フローベール『ヘロディアス』におけるルキウス・ヴィテリウス

大橋 絵理

長崎大学大学教育機能開発センター

Lucius Vitellius in *Hérodiás* of Flaubert

Eri OHASHI

— Research and Development Center for Higher Education, Nagasaki University —

Abstract

In 1876, Flaubert wrote "Hérodiás" dealing with one episode of the "New Testament", the decapitation of John the Baptist during the birthday banquet of Hérode Antipas who was the king of Galilee, a province of the Roman Empire. In this tale, Flaubert introduces Lucius Vitellus, consul of Roma, who didn't actually participate in this banquet. In this paper, I shall analyze why Flaubert changed this historical fact, by looking through his reading notes and his manuscripts. In the manuscripts, at first, Vitellius was written as a politically and mentally complicated person, but gradually, his image was simplified. On the other hand, two other selves of Vitellius, Sisenna, the publican and Phinéés, the interpreter, whom Flaubert created completely, came to play very important roles. That is, the former represented the political aspect because of from a viewpoint of a tax, and the latter represented the religious side which shifted to Christianity because of the influence of the biblical language, at the time of the Roman Empire. In the letter, Flaubert said that the racial issues were the most important in this tale. After all, the appearance of Vitellius and his other selves change this biblical episode into not only a religious tale but also a political and racial one, which is a present day problem, too.

Key Words : Flaubert, Trois Contes, Hérodiás, Vitellius

1. はじめに

『新約聖書』の有名な1エピソード、サロメと洗礼者ヨハネ=ヨカナンの斬首をテーマにした『ヘロディアス』¹執筆の際、フローベールは、ヘロド・アンティパスがガリレヤの太守であった紀元前後のユダヤの思想、ユダヤを支配していたローマ帝国の政治、様々な宗派や民族の対立、斬首が執行されたヘロドの饗宴等を可能な限り再現しようと務めた。そしてほぼ2ヶ月間を資料収集と読書ノートに費やしたことは周知の事実である²。だが、『新約聖書』の中で

ヘロドの饗宴に参加したとは書かれず、史実にもそのような記述は一切ないにもかかわらず、このコントに彼が故意に登場させたと考えられる歴史上の人物達がいる。それは、ローマの執政官のルキウス・ヴィテリウスとその息子で69年にローマ皇帝となったアウルス・ヴィテリウスである。ただし、従来の研究にあっては、饗宴の場面の分析³、あるいは多神教からキリスト教への移行が論じられたりしているが⁴、ヴィテリウス親子の登場の理由についてはほとんど語られていない。本稿では、カルネ、プラン、

草稿を通じて、何故フローベールが史実を変更してまでも、歴史上際立って重要な役割を果たしたとは言えない人物、ルキウス・ヴィテリウスを『ヘロディアス』に登場させる必要があったのかを考察したい。

2. ヴィテリウスの2面性

まず舞台となった紀元前後のユダヤの状況を概観してみよう。ヘロド大王が紀元前4年に亡くなり、彼の領土パレスティナは3人の息子達によって分割統治されることになった。その中でガリレヤとペレアを支配する分国王となったのがヘロド・アンチパスである。ただし、ヘロド大王の時代からパレスティナはローマ帝国の支配下にあったので、ヘロドも事実上ローマ帝国の代官にすぎず、実権はローマの属州シリア総督が握っていた。『新約聖書』では、ヘロドはヨカナンを捕らえ、自分の誕生日の饗宴の際、妻ヘロディアスの娘サロメの要求で彼を斬首したと記されている。

このヨカナン斬首の年は歴史上確定されていないが、フローベールは読書ノート f° 661v で次のようにメモしている――

Hérode redoutait les rassemblements que causait Jean. emprisonné en 30 décapité en 31 || J Ch. fut crucifié en 33. Tibère meurt en 37.

Les Arabes paraissent avoir possédé Machærous avant le retour de Rome d'Hérode A. - || qui le reprit sur eux. Vitellius le soutenait, car par l'ordre de Tibère il marcha contre || eux. ⁵

紀元前5年前後に誕生し51年に死亡したとされるルキウス・ヴィテリウスは、34年にローマ皇帝ティベリウスのもとで執政官に任命され、35年からシリア属州総督、36年からはユダヤ属州総督となっている。『ヘロディアス』の中でヴィテリウスは「*gouverneur de la Syrie*」⁶と書かれているが、ヨカナンの斬首は31年とフローベールが考えていたことから計算すると、少なくとも史実との間に4年の誤差が認められる。

また、『ヘロディアス』の中では、ヴィテリウ

ス親子がマケルースの城を訪れるのは、ヘロドが、弟の妻であり同時に姪であるヘロディアスと結婚するために、アラビヤ王アレタスの娘と離婚し、その行為に怒ったアレタスがヘロドに対して送った軍隊からヘロドを防御するためだとされている。つまり、ヘロドがティベリウス帝に救援を要請し、ティベリウス帝がヴィテリウスの軍隊を派遣したのであるが、それはティベリウス帝の死の直前、36年頃であったと考えられている。この出来事はフラヴィウス・ヨセフスの『ユダヤ古代誌』で次のように記されている――「ヨアンネス（ヨカナン）はヘロデ（ヘロド）のこの疑惑のため、前述した要塞のマカイルス（マケルース）へ鎖に繋がれて送られ、その地で処刑された。そして、ユダヤ人達はヘロデの軍隊がここで敗北したのはヨアンネスの復讐によるものと考えた。神がヘロデを罰することを欲したもうたからというわけである」⁷。このようにヘロドがティベリウス帝に軍隊を要求したのはヨカナンの斬首後であったとされており、実際フローベールもヨセフスの『ユダヤ古代誌』を読み、「*La défaite de d'Antipas est attribuée à la mort de Jean-Baptiste. 240¹. V. prit deux légions marcha sur Pétra, arriva à Ptolémïade*」(f° 674r)とノートをとっている。以上のことから、フローベールが史実を辿りながらも、この出来事に関しても意図的年代を変更したことは明白である。

その変更の理由を解明するためには、まずフローベールが創作したヴィテリウスの人物像を、外面的特徴と内面的特徴の2方向から分析する必要があるだろう。それでは、まず外面的特徴を見てみよう。ヴィテリウスに関しては、すでにカルネ 16bis の F°. 22, C の中で、息子のアウルスに続き「*Le père gouverneur de Syrie figure de chacal, forte mâchoire, front droit, nez en avant, long cou*」⁸と記されており、フローベールがヴィテリウスのシリア総督という地位を重視していたことがわかる。当時シリアはローマ帝国の属州の中でも文化的レベルが非常に高く、オリエント支配のために地理的にも重要な国であり、その総督は東方の行政官の中で最

も高い地位とされていた。しかも、ヴィテリウスがそのようなシリア総督に任命されたのは、ティベリウス帝の期待を一身に背負ったためであった。当時パルティアがアルメニア王国の王位継承の問題に介入し、ローマからアルメニアを奪おうと試みた。それを阻止するために、皇帝はヴィテリウスをシリア属州総督に任命し、東方全域の最高指揮権まで与えパルティアに派遣した。その時、ヴィテリウスはシリア属州駐屯の4個軍団を全く利用せずに、東方の国々が各々の利権のために戦っている状況を傍観する姿勢を示し、パルティアを自滅に導きローマにほとんど損害を与えることなくアルメニアを防衛するのに成功したのである⁹。

さて、このカルネでは総督という地位に続いて彼の容貌がメモされているが、その特徴は、《 *chacal* 》という言葉につきると言えよう。ジャッカルは自分では狩りを行わずに、他の動物の獲物の残りの腐肉を食べる一種の狡猾さや卑劣さを象徴する動物と考えられている。事実、ヴィテリウスの顎、額、鼻、首の描写は冷静かつ計算高い判断を下す完璧な策士として性格を暗示していると言えるだろう。

だが、プランの段階になると、特にある特徴が全面的に押し出される。f° 736v では《 *Vitellius, toge, prétexte, laticlave brodequins blancs. — Aspect rigide : mâchoire de chacal || front sévère* 》と彼のジャッカルのような容貌よりも衣服の方が先に描写されるようになる。しかも《 *toge* 》は古代ローマの服、《 *prétexte* 》も古代ローマの司法官が着た緋色の縁取りのある白い外衣、《 *laticlave* 》は紫色の条飾りのついた元老院議員用のチュニカというように、彼の衣服はすべてローマの特権階級の象徴となっている。

そして、草稿の段階になると、カルネから続いていた容貌の描写は完全に消去され、それに代わって衣裳のみが描かれるようになる— 《 *la toge, le laticlave, les brodequins d'un consul, α || des licteurs autour de sa personne ↓ de lui ↑ de la litière ↑ de sa personne de sa person[ne]* 》(f° 553r)。《 *brodequins* 》に関しても、f° 736v で

の「白い」という形容詞が削除され、皇帝に次ぐとも言える地位「執政官」という言葉が付加される。それによって、ローマ帝国の権力者であることが執拗なほどに繰り返されることになるのである。ヴィテリウスの周囲の警護についても f° 556r では一般的な「兵士 *soldats*」という言葉が使用されていたが、ここではローマ時代独特の「束かんを持って政務官の先駆けをした下級官吏 *licteurs*」に取って代わっている。

そして、最終稿では、《 *ayant la toge, le laticlave, les brodequins d'un consul et des licteurs autour de sa personne* 》¹⁰ と記述されるに至る。

要するに、ヴィテリウス自身の固有の容貌が消失し、執政官の服装が強調されるこのような変化は、フローベールが、彼をなによりも当時のローマ帝国の属州に対する専制的な権力の象徴としようとしたことを物語っている。

しかし、ヴィテリウスの人物像には、容貌の欠如と反比例するかのようになり、ある興味深い内面性が付加されていく。プラン f° 726r を見ると、《 *Arrivée de Vitellius ↑ X ↑ à pied avec son fils ↑ en litière [...]* l'importance du fils. Le père est bien obligé de le subir. α presque de lui obéir 》とマケルースの城へ父親は徒歩で息子は輿に乗って到着し、息子に従う父親像が《 *subir* 》と《 *obéir* 》という2つの動詞によって強調されている。フローベールは草稿で息子のアウルスの年を15歳と記しており¹¹、当然息子はいかなる役職にもついていないにもかかわらず、ヴィテリウスはなぜか常に彼に譲歩するのである。そればかりか、同じフォリオの3章の饗宴の場面では、《 *↑ Vitellius se se trouve bien seul. On peut l'assassiner cela était commun dans les festin[s] [...]* ↑ *Vit est sur le point de partir ↓ Aulus l'en empêche* 》(f° 726r)とローマの独裁的権力を握っているはずのヴィテリウスが、属州の人々の間で孤独を感じ自分が暗殺されるのではないかと不安におびえ、その場をすぐにも出て行くことを望む。だが、彼は息子の反対によって、従順とも言える態度で饗宴の場にとどまることを選択するのである。

その後、草稿が進むにつれ、彼の孤独感は

f° 718v に見られるように、自分自身が憎まれていると感じるような、より激しい感情に取って代わる— 《↑ *Vitellius se sent hāi*, ↑ < *comme* > ↑ *on peut le tuer comme cela se pratique souvent dans les festins*. Il a envie de partir. – Mais Aulus qui vient || de se faire vomir α s'est remis à manger le retient 》。しかし、やはり吐きながらでも食べ続けたいというアウルスの卑俗な欲望の前で、逃げ出すことをあきらめるのだ。だが、最終稿では、次のような文章に落ち着く—

Leur dieu pouvait bien être Moloch, dont il avait rencontré des autels sur la route; et les sacrifices d'enfants lui revinrent à l'esprit, avec l'histoire de l'homme qu'ils engraisaient mystérieusement. Son cœur de Latin était soulevé de dégoût par leur intolérance, leur rage iconoclaste, leur achoppement de brute. Le Proconsul voulait partir. Aulus s'y refusa.¹²

ここでは、彼の個人的な感情、つまり孤独感や暗殺の恐怖という内面的な虚弱性は徹底的に排除される。そのかわり、《 *Son cœur de Latin* 》という言葉からも理解できるように、彼の考えは、当時のローマ人が一般的に抱いていたユダヤの民の宗教に対する偏見と嫌悪感に集約されることになる。しかし、やはり父は息子の拒絶に従うのである。

そして、この奇妙な服従の答えはフローベールがスエトニウスの『ローマ皇帝伝』を読んでメモした読書ノート f° 669v の中に見出されるであろう— 《 *Mignon de Tibère, d'où fut surnommé Spintria* 》¹³。もちろん、スエトニウスの著作はスキャンダラスな内容が多いことで知られており、必ずしも史実に忠実であると考えられていないにもかかわらず、フローベールは彼の言説を『ヘロディアス』の草稿 f° 564r に取り入れるのである—

~~son père parut blessé de l'inconvenance qui était~~
↑ *un tel mot était un empiètemt sur ses* || *droits*. –
mais ne dit rien – ~~Il devait sa haute~~ ↓ *la fortune* ↑

sa h^e fortune ↓ ~~*s'étayait*~~ ↑ ~~*avait p. base*~~ ↑ *venait*
~~*à la protection*~~ || ~~*de Tibère...*~~ ~~*le ménageait, lui*~~
~~*laisait prendre toutes les libertés*~~ ↑ *de*
l'avilissement de son/du fils – ~~*ce qui*~~ || ~~*ne*~~ ↑ *ce qui*
l'empêchait d'avoir l'air ↑ *le proconsul/V*
d'avoir l'aspect très digne. [...] ↑ *la pâleur des*
politiques α le ton naturel de l'autorité

ここでははっきりと、ヴィテリウスが息子に逆らえないのは、彼の財産がティベリウス帝の愛玩者である息子に負っているからだと言明されている。彼は、息子の機嫌を損ねることで、ティベリウス帝の怒りをかい、財産を失うのではないかと恐れているのだ。さらに「政治的な精彩のなさ」と「権力的な自然な口調」という対比的な要素がヴィテリウスの中に混在しているという文章は興味深い。なぜなら、結局、彼の威厳やローマ帝国の執政官であるという属州民に対する高圧的な態度は、実は政治力とは無関係の息子の行状に支えられたものであることが明白となるからである。

この文章は最終稿になると、次のような表現に変わる—

Le Proconsul feignit de n'avoir pas entendu. La fortune du père dépendait de la souillure du fils; et cette fleur des fanges de Caprée lui procurait des bénéfices tellement considérables, qu'il l'entourait d'égards, tout en se méfiant, parce qu'elle était vénéneuse.¹⁴

ここでは、ティベリウス帝の名前はもはや明記されず彼が隠遁していたカプリ島の「泥沼に咲くこの花」という比喻で、アウルスの立場が暗示されているにすぎない。それによってスキャンダラスな内容よりも、《 *tout en se méfiant, parce qu'elle était vénéneuse* 》というように、ヴィテリウスが息子に対して財産を喪失しないように常に懐疑心を抱き警戒する態度が強調されるようになっている。

以上のように、プランや草稿を分析すると最初ヴィテリウスには複雑な要素が絡み合った2

面性が備わっていたことがわかる。しかし、最終稿に至る過程で、外面的には容貌の削除、内面的には精神の脆弱性の削除が進み、結局は、権力を誇示しながら、地位保全のために感情に流されず平静さを保つやや単純な人物像へと帰着していると言えるであろう。しかし、これらの削除に伴い、ヴィテリウス親子とは異なり完全に想像上の人物でありながら、常にヴィテリウスに従い行動を共にする2人の登場人物、収税吏のシゼンナと通訳のフィネの重要性が増していくのである。

3. 収税吏

まず、最初に当時のローマ帝国の税制度を見てみよう。ローマ帝国では、紀元前27年に初代ローマ皇帝アウグストゥスが、それ以前は定まっていなかった貨幣体系を統一し、深刻な腐敗を生みだしていた税制度を改革した。最も特徴的なのは、すべての属州で人頭税を導入し、直接税として収入の10パーセントを納めさせたことである。また穀物、動物、道路、港等にも税金をかけるなど、このシステムが広大なローマ帝国を支える基盤となった。その結果多くの属州から税金を徴収する役人が必要となり、それが収税吏となったのである。また同時この厳格な税制システムによって属州の人々は苦しい生活を強いられることになり、ローマ帝国及び、不正に税を取り立てることも多かった収税吏に対する不満や憎悪が高まったことも忘れてはならない。

さて、『ヘロディアス』創作過程においては、プランの段階から収税吏が出現する。例えば、饗宴の参加者のプラン f° 740r を見ると「収税吏達 Publicains」が下線とともに強調して記されている。また、再び参加者がリストアップされているプラン f° 703r では、「<Sisenna> ↑ Marcellus lieutenant de/u <Vitellius> ↑ propréteur. Sisenna. Publicain, représentant de la campagne des impôts」¹⁵と、シゼンナという個人名と職業の内容が具体的に述べられている。しかもヘロドやヴィテリウス、アウルスも含めたほぼ16名の饗宴の参加者の中の7番目に位置しているこ

とから、シゼンナがいかに重要な位置を占めているかが確認できよう。最終稿では、「« sous le Proconsul : Marcellus avec les publicains »」というように、プラン f° 740r と同じ記述にもどっているが、やはり収税吏達が饗宴に参加していることに変わりはない。

さて、3章構成の『ヘロディアス』の中の2章では、武器や軍馬が隠されている地下をヴィテリウスが次々と発見し、その結果ヘロドが追い詰められるという内容が中心となっている。そして、草稿 f° 577r では、その隠匿の露見の際、以下の人物がヴィテリウスと供にいたことが記されている— « Sisenna le chef des publicains α ses deux scribes. Phinées l'interprète || Marcellus α jusqu'au ↑ α-mé ↑ le proconsul »。地下では、数々の武器が発見されるにもかかわらず、最初に名前があがるのはシゼンナ、次いで通訳のフィネとなっており、最も軍備に関係があるはずの総督の副将軍であるマルセルスの名は最後にしかあげられていない。さらに、f° 607v になると、マルセルスの名前は消去され、フィネには取り消し線が引かれ、シゼンナの名前だけが書かれるようになる。そして、最終稿では、「« Vitellius, Phinées son interprète, et Sisenna le chef des publicains, les parcouraient à la lumière des flambeaux, que portaient trois eunuques »¹⁵と副将軍は存在しないまま、シゼンナとフィネだけがヴィテリウスと供に行動するのである。それでは、シゼンナはどのような役割をこのコントで果たしているのだろうか。

ヴィテリウスの指示で、地下に隠されていた多くの駿馬の発見後、f° 579r では次のような文章が見られる—

Le Publicain les compte. || Puis un pan-de-mur suspect. le fait lev ↑ des disques sur les citernes lui semble suspect. - ↑ est plus sourd ε a plus g^d ↑ que les autres ↓ Antipas plus embarrassé, encore Le publicain donne l'idée que ce pourrait bien être ↑ - « c'est peut-être là » exclama ε dit Sisenna la cachette || des trésors d'Hérode le g^d. A ↑ A dit - Non. - eh bien, alors on peut la voir.

まず、シゼンナは、ヘロドの馬を数える、つまり馬を税として徴収するという役割を果たしている。もちろん、城を査察することを提案し、数々の武器や駿馬が隠された4つの地下部屋を見つけたのはヴィテリウスであった。しかし、この2章で最も重要なのは、注意深く地下牢に幽閉されていたヨカナンが発見されるというエピソードであり、なによりもその地下牢を見出したのは徴税請負人シゼンナであったことは無視できない。彼は地下牢の蓋を見つけた時、ローマ人が必ずどこかに隠されていると信じ熱望していた「ヘロド大王の宝だ」叫ぶ。実際は「ヘロド大王の宝」と思われたものがヨカナンであったということは、換言すれば収税吏に発見されたヨカナンこそが隠されていた「宝」だったのであり、徴収されるべき税であったということになる。

さらに進んだ草稿 f° 612r では、ヘロド大王の宝を探すシゼンナの容貌が次のように描写される—

Représentant des compagnies – s'étendaient avec les gouverneurs de provinces || partageaient avec lui. – Supposant que les choses les plus précieuses étaient || cachées, furetait par tout – son nez de chacal. α clignant ↑ les yeux – ↑ Une idée || fixe le tenait, découvrir les trésors d'Hérode. Manie romaine.

彼が「ジャッカル」をして財宝の有無を嗅ぎまわっていると記されていることに注目しよう。もちろん前述したように「ジャッカル」は、カルネの段階からヴィテリウスの容貌を象徴する動物として使用されていた言葉であり、『19世紀ラルース』では、死体を食べるために墓をあさるとも書かれている。ジャッカルと、亡くなったヘロド大王の財宝を探すために地下を探索するシゼンナの行動は、まさに合致していると言えるだろう。実際、収税吏については f° 613r の下の余白にも、« les Publicains (agents de la ferme ⊆ compagnie des fermages de Rome) d'arrêter les voyageurs, p. les fouiller, de || secouer

leurs habits » とメモされており、他人の財を略奪する者であるという考えがフローベールにあったと考えられる¹⁶。

ただし、f° 538v になると他の文章は変化していないが、「ジャッカル」が「狐の顎をして avec sa mâchoire de renard」という言葉に変化し、最終稿では、次のように書かれるに至る—

Celui-là flairait partout, avec sa mâchoire de fouine et ses paupières ignotantes.

Enfin, on remonta dans la cour.

Des rondelles de bronze au milieu des pavés, ça et là, couvraient les citernes. Il en observa une, plus grande que les autres, et qui n'avait pas sous les talons leur sonorité. Il les frappa toutes, alternativement, puis hurla, en piétinant :

- « Je l'ai ! je l'ai ! C'est ici, le trésor d'Hérode ! »

La recherche de ses trésors était une folie des Romains.¹⁷

シゼンナのヘロド大王の宝に対する感情は « une folie des Romains » と表現されるが、これは、先に最終稿で見られたユダヤの民に対するヴィテリウスの感情、« Son cœur de Latin » を想起させる。つまり、両者の感情は個人的な思考から生じているのではなく、ローマ帝国全体の思惑でしかないという点で類似しているのである。最終的にはシゼンナは「テンの顎 sa mâchoire de fouine」をして嗅ぎまわり、「ジャッカル」より矮小で狡猾なイメージを持つようになる。しかし、ヴィテリウスの容貌の描写から消去された「ジャッカル」的要素が、シゼンナに受け継がれたということは確実であろう。

というのも、ヴィテリウスと税金の関係は読書ノートの段階から重視されていたからだ。読書ノート f° 669v で、フローベールはすでにルキウス・ヴィテリウスの父のプヴリウス・ヴィテリウスは財務官であったというメモを取っている¹⁸。当時は財務官が元老院のメンバーを検討したことからもわかるように、財務官は高い地位であり、ヴィテリウスは父親の高官としての

影響もあり自分自身の地位が向上したとも言われていたのである。また、同じく読書ノートの f° 668r では、ヴィテリウスがシリアの総督であった時の税金に関する出来事が書きとめられている。カッパドキアのアルケラス王が支配下のキエタイ族にローマ風の財産申告によって貢物を納めるように強い、それをローマへの謀反としてヴィテリウスはカッパドキアを攻撃するのだ— 《 Vitellius [g^r de Syrie) envoie contre les Clites de la Cilicie qui refusaient l'impôt, Trebellius avec quatre mille légionnaires || et l'élite des alliés »¹⁹。このように、定められた税金を納めないことは、ローマ帝国への最大の反逆の一つであり、決して許容される行為ではなかった。特に反逆罪、不敬罪の告発及びそれに対する厳しい処罰がティベリウス治世下の大きな特徴であったことから、税金を納めることを拒否した者や属州は徹底的に攻撃されたのだ。そしてプラン f° 749r になると、フローベールはヴィテリウス個人の税金に対する考えを創り出していく— 《 Vitell. ↑ s'en s'informe. Rien de plus vrai. † Or il est sévère sur cette question, qui est capitale p^r les Romains. - 》。このように、ヴィテリウスは、税金はローマ帝国の貴重な財源、つまりローマ帝国の基礎を支えるものだという意識をはっきり持っていたのである²⁰。

それにしても、何故、収税吏であるシゼンナがヨカナンを発見するというエピソードが考え出されたのだろうか。実はこのコントでは、ヨカナンと税金は密接な関係を持っているのだ。プラン f° 742 r では、《 Jean poussait au refus de l'impôt – Acte patriotique 》と、ヨカナンがユダヤの民としての愛国心から、ローマ帝国への税金支払い拒絶を呼び掛けていると記されている。

そして、ヨカナンは税金を払う必要はないと公言しているとヘロディアスから聞くと、シゼンナとヴィテリウスは f° 617v に見られるような行動をとる—

Sisenna va de l'un à l'autre. « est-ce vrai? - † X a sur le blé? a sur les ports? - a † sur le passage des routes sur les troupeaux A || sur X? ... à

~~chaque question oui.~~ † † a ~~abondant l'un~~ † † ~~abondant~~ † ~~allait d'un juif à un gree~~ Syrien † des Syriens aux juifs [...]

~~Importance de la question.~~ Vitellius ne badinait pas là dessus † était capitale p. les Romains; a la manière dont il avait traité les Clites prouvait qu'il ne badinait pas là dessus.

Il ~~pose des sentinelles~~ † a † † mais † la conduite du tetrarque

† d'Antip † envers † à l'égard de son prison[nier] || † † lui semblait lourde/che † obscure † il parla bas à Marc.[ellus] et imméd[iatement] des sentinelles fur[ent] posées.

ここではまずシゼンナが「麦」「港」「通行」「家畜の群れ」というように様々な具体的な税の対象をあげている。実は、プラン f° 698 r で、《 après le départ de Ponce Pilate voyage de Vitellius à Jérusalem, où † - n'entend pas raillerie sur l'impôt (Annal[es] VI. 32 Vitellius fait remise aux juifs de plusieurs impôts 》とあるように、ヴィテリウス自身も、ユダヤの民と税金問題で関わったことが書きとめられていた。そのことから、シゼンナがあげる上記の諸税はヴィテリウスと税金との関連を想起させるものとなっている。事実、シゼンナがヨカナンの税に対する言動が本当かどうか質問した相手は、ユダヤ人やシリア人に限定されているのだ。彼らのヨカナンの噂は真実であるという返答に対するヴィテリウスの態度も《 bandinait 》という強い言葉で表現されるばかりか、この草稿にはノートの f° 668r ですで見えた、税金を拒絶したキエタイ族に対するヴィテリウスの懲罰のエピソードも挿入されている。ヘロドが律法を犯し異母兄の妻であったヘロディアスと結婚したことを弾劾するヨカナンの言葉は、ほぼすべて『旧約聖書』²¹ からの引用であり、他の人々には神の言葉として衝撃と恐怖感を与える構図になっている。だが、ヴィテリウスはヨカナンの預言よりも税金という金銭的な問題に反応し、見張りの歩哨を置く決意をするのだ。

同様の表記は、f° 597r、f° 593r、f° 595r にも

繰り返して見られるが、最終稿では、次のように書かれるに至る—

« Est-ce vrai? » demanda tout de suite le Publicain.

Les réponses furent généralement affirmatives. Le Tétrarque les renforçait. Vitellius songea que le prisonnier pouvait s'enfuir; et comme la conduite d'Antipas lui semblait douteuse, il établit des sentinelles aux portes, le long des murs et dans la cour. ²²

ここでは、シゼンナの税金徴収に対する執着も弱められ、税金拒絶に対するヴィテリウスの関心も完全に消去されている。そして歩哨を置いたのは、ヨカナンを逃がすのではないかというヘロドへの不信感が原因だとされている。しかし、ヴィテリウスがヨカナン幽閉を強化するというエピソードの大きな理由は、実は税金の徴収の問題であったことは草稿分析によって否定できないであろう。

以上のことを考慮すると、シゼンナはヴィテリウスの分身であり、彼のヨカナンの発見は、ヴィテリウスの意思でもあったと言える。最初フローベールはローマ帝国の権威と金銭問題をヴィテリウスという歴史上の人物に集約しようとしたが、執筆過程でヴィテリウスの金銭的執着を収税吏シゼンナに負わせることで、さらに明確に当時の社会的・政治的状況を再現しようとしたと推測できる。その中であえてシゼンナに地下牢のヨカナンを発見させたというフローベールの意図は、ヨカナンを聖書的な存在だけではなく、現実的人物として描きたいという考えの表れだとも言えるであろう。

4. 通訳

それでは、次に通訳について見てみよう。まず、プランの最初の段階である f° 735r の下の余白に « Vitellius a un interprète. ↑ *Phinées, un petit Syrien mais il enetnd très bien ce qu'on dit* » という文章が見られるが、この段階で通訳に付けられたフィネという名前とシリア人という国籍

は最終稿に至るまで変化することはない。シリアは当時属州としてローマと自国との狭間で引き裂かれた国である。フィネ自身もシリア人でありながらガリレヤで生まれ、その後権力者側に立ちローマ帝国の言葉を通訳するというように様々な要素において狭間に位置する人物であることを、まず確認しておこう。事実彼がシリア人であるという記述は、その後執拗なほどに繰り返されるようになるのである。

さて、プラン f° 733r では、« Arrivée de Vitellius ↑ à pied avec son fils, <l'un à pied, l'autre> en litière - ↑ <le Syrien> ↑ *près d'eux leur ↑ interprète. ↑ un petit Syrien* » と記される。このように通訳はヴィテリウスとアウルスのすぐ傍についてマケルースに入城するが、最初は、親子2人のための通訳であった。

だが、草稿 f° 555r になると、ヴィテリウスは警護の兵士でも自分の息子でもなく、通訳の腕にすがって歩くばかりか、« *s'appuyant* » という動詞の使用によって、通訳に依存しているような印象さえ与える— « ~~Sans escorte ayant près de lui~~ ↑ *en s'appuyant le / sur bras d'un Syrien* ↑ *de* ↑ *sur son interprète* ». それと呼応するかのように、プラン f° 733r での「彼らの通訳 *leur interprète*」という所有形容詞が、この草稿ではさらに限定された「彼の通訳 *son interprète*」へ変更されるのである。さらに同じフォリオの後半で、フローベールは通訳について次のように詳細に書き留めている—

Le Syrien ↑ ~~un jeune homme~~ son interprète ↑ *jeune hom[me] en robe bleue à manche pas de barbe* ↑ ~~jeune hom~~ — *Souriant un* ↑ *le regardant p. saisir ses paroles* || ~~Sourire continuel~~ ↑ *décent eomme un [iH] les yeux baissés.* — ~~Le regardait eomme un chien de chasse~~ ↑ *le regardait p. deviner* ↑ *savoir* ↑ *ses int*

プラン f° 735r では通訳に「小さな」という身体的な特徴を表現する形容詞がつけられていたが消去され、この草稿では「若い男」という点が強調される。この言葉は、彼が未成熟であり、

経験も少なく確固とした人格を所有するにいたらない存在であること、さらに眼を伏せ、微笑みを浮かべ「狩猟犬のように」ヴィテリウスを眺め主人の言葉を捕らえようとする態度は、ヴィテリウスの意図のもとに行動し、完全に主人に服従する者であることを示している。要するに、フィネもまたヴィテリウスの分身だと言えるであろう。

それでは、フィネはどのような役割を果たすために創造されたのであろうか。彼はプラン f° 702v で次のような行動をする — « *Phinées, l'interprète y descend, remonte. α répète d'un ton impassible α les yeux baissés || toutes les invectives de Jean* ». この場面は、草稿の段階になるとさらに展開していき、f° 605r では、以下のように述べられるようになる —

V. donna l'ordre ↓ *fit un ↑ signe à Phinées d'aller près de lui ↑ descendre ↑ Phinées descendit || α il rapporta ce qu'il*

Le Pr. ordonna ↑ *fit un signe à l'int. ↑ Phinées || Ph de se || rendre près de lui*
Phinées remonte, se piète ↑ *son portrait traduit – Phinées ramassa ↑ qui ↑ avait ↑ pâlit. Puis ↑ retroussa le bas de sa robe – pose le pied avec précaution, ↑ α se collant contre la paroi de ↓ l'excavation lentemt || marche à marche – car les marches étaient ↑ fort étroites ↑ [H] et le trou très || profond s'enfonça marche à marche ↑ il s'abaissa lentemt - - . . α disparut ↑ dans ↑ X ↑ une des ↓ anfractuosités*

H-y [eut] un moment de silence – ↑ *On se taisait. dans l'attente de ce qui allait || venir [...]*

D'abord on entendit – ↑ un ↑ le ↑ bourdonnement de paroles basses échangées ↑ comme ↑ en font deux personnes ↑ voix qui parlaient ↓ au loin – une aiguë, une || grave.

フローベールは、ヴィテリウスの命令でフィネが、ヨカナンが幽閉されている地下にたった一人で降るとい文章を何度も繰り返し書いている。それはヴィテリウスこそがヨカナンとの接

触を最も望んでいる人物であり、フィネはヴィテリウスの身代わりとして地下へ降っていったのだということを示唆している。そのため、他の人物達は、暗黙のうちにヨカナンと接触する人物が絶対にフィネでなくてはならないことを理解しており、事実フィネの後をついて降りる人物は誰一人としていないのである。彼らは沈黙のまま地上で待ち、フィネの「鋭い声」とヨカナンの「重々しい声」を遠くから聞くだけなのだ。さらにその地下牢の底が深く、フィネがゆっくりと注意して一步一步狭い階段を降りていく描写は、ヨカナンがいるのは現世と非常に隔たった空間であり、簡単に到達できない異界であることを暗示していると考えられる。

さて、次の f° 591r ではフィネが地下牢からもどってくる場面が描かれる —

Phinées remonte. on s'écarte par une sorte de respect.

Le Syrien maladif – les mains dans ses manches – robe bleue - || posé, air grave – p les yeux baissés, - immobile comme une statue - || Comme c'était son devoir, - redit tout.

- du même ton.

- Je suis la voix du désert.

古代から、地下降りは地上では隠蔽されたもの、真実に近い何かを発見するという隠喩的な旅とされ、本来神聖なものであった。フィネが地上に戻って来た時、人々が「一種の尊敬から」後ずさりしたという表現は、異界で預言者に会い、無事に帰還した者への畏れが見て取れる。奇妙なことに地上に戻ったフィネはもはや、地下に降る以前のヴィテリウスの分身のような存在ではなくなっている。手を服の袖の中に入れ、目を伏せる「銅像」と見間違ふほどの姿は、視覚も触覚も失い、意思を完全に喪失した虚像そのものだと言えるだろう。なによりも、彼が地下で身につけた「重々しい雰囲気 air grave」と、f° 605r のヨカナンの「重々しい声 une grave」は同質のものであり、« *Comme c'était son devoir, - redit tout. — du même ton* »という

表現からも、フィネは、今度はヨカナンと同化し彼の使者となったかのような印象を与える。事実 f° 605r に見られたように、地下では彼らは確かに会話を交わしたはずであるのに、地上に戻ったフィネは彼自身の言葉を発することなく、ヨカナンの言葉を「義務のように」同じ調子で繰り返すにすぎないのだ。

しかし、フィネが地下に降ってヨカナンと接触するという特権的場面は徐々に削除されていく。そしてそれにかわって、f° 600v で《 *C'était un jeune syrien maladif* 》と書かれたフィネの病気が、次第に強調されるようになる。フィネは地上に留まったままであるが、病はヨカナンの通訳をするにつれますます悪化し、彼は発熱、疲れ、発汗に襲われ、f° 589r では次のように描かれる—

L'interprète || commençait à se fatiguer. Il avait pris ~~la fièvre dans son voyage~~, la/es fièvres du Liban || ~~quoiqu'il fut Syrien~~ α il † α grelottait sous sa longue écharpe enveloppant † ~~couvrant à la fois~~ † de plu[sieurs]tours || ~~son cou~~ † ses joues † ~~sa mâchoire~~ α ses épaules.

フィネは悪寒のため首や肩という身体だけでなく、頬や顎や顔にも長いマフラーを幾重にも巻きつけるが、この姿はミイラを想起させる。実際フィネの状態は f° 638r でも《 les || mains † bras en croix sur la poitrine. 》と書かれ、胸の上で腕を十字に組む姿はまさにミイラの形状であると言えるだろう。ミイラは死者が神の国で再生するために保存された肉体であり、神の国と現世との移行上の媒介的身体である。また、病気も生から離脱し死の世界へ向かう途上の状態でもあることから、熱に浮かされた異様なフィネの姿は、生と死の狭間に陥ったことから生じたとも考えられるであろう²³。さらに、f° 600v では、単に《 *maladif* 》としか記されていないフィネの病気が、ここで「レバノン熱」というシリアの熱病であると明記されるのも意味があるだろう。彼の病は、属州という狭間の国であるシリアの熱病でなくてはならなかったの

であり、このような死に接近しているフィネの姿は、シリア総督ヴィテリウスが草稿で、暗殺つまり死の恐怖に怯えていた姿とも重っていく。

しかし結局、最終稿では次のような場面に落ち着く—

Vitellius s'obstinait à rester. L'interprète, d'un ton impassible, dans la langue des Romains, toutes les injures que Iaokanann rugissait dans la sienne.²⁴

このように最終的には、フィネの地下降りだけでなく、病気の描写もすべて削除され、ただ皆が地下のヨカナンの声を地上で一方向的に聞き、それをフィネが通訳するというだけになる。その中でまず、《 *d'un ton impassible* 》というフィネの通訳の声の調子に注目しよう。実は《 *impassible* 》という単語は、f° 583r の余白にも見られるように、草稿段階でフィネがヨカナンの通訳をしている時のヴィテリウスの態度についての表現に使われていたのである—《 *Phinées (sa pose) traduisait chaque morceau – impassibilité de Vitellius* 》。さらに、f° 596v では、「シリア語 *en syrien* 」と書かれていたヨカナンの言語が、ここでは「彼の言語 *la sienne* 」すなわち、フィネの言語、という言葉になっている点にも注意を払うべきであろう。《 *la sienne* 》とは本来は「彼のもの」という所有を表現する単語であり、その使用は、フィネの言語の中にヨカナンの言語が取り込まれているような印象を与える。つまり、他の人々に動揺を引き起こすヨカナンの言葉に対して、ヴィテリウスは普段抱いているユダヤの宗教への嫌悪感を示さず、平静に受け入れ、またフィネも、もはや熱病を伴わずに平静な状態でヨカナンの『旧約聖書』の言葉と一体化するという状況が記されているのである。

それでは、何故フィネの地下降りや熱病の描写がなくなったのだろうか。その理由は、3章の饗宴の場面に見出される。ヨカナンの言葉をそのまま受け流したヴィテリウスであるが、プラン f° 718r では次のように尋ねる—

Vitellius ↑ (*jusque là occupé à autre chose*)
demande ce que c'est.

— «Un prophète mort depuis longtemps»
répond Antipas.

— Vit. ne comprend pas, qu'un <prophète> mort
pu exciter tant d'agitation || et qu'on affirmat
l'avoir vu, demande à son interprète ce qu'est
Élie.

↑ *et l'interprète ajoute* : <Un ancien> ⊆ un
ennemi des rois. <miracles. α> attirait la foudre
sur les || montagnes, brûle les <peuples> ↑
idoles. — <gé> être terrible dans l'imagination
popul.[aire]

Vitell pense ↑ *conclut* qu'étant un
personnage fabuleux, il n'est pas à craindre.

この部分は、饗宴に参加した人々が、ヨカナンがエリヤなのか否かを盛んに議論している場面である。その中で、ヴィテリウスはユダヤで話されている言語は理解できるが、「エリヤ」の意味を知らず最初にヘロドに聞く。その返答を聞いても理解できないヴィテリウスはフィネに同様のことを尋ねるが、その時フィネは通訳としての役柄を離れて、宗教的な事柄に精通している者として発言しているのである。彼は、エリヤは「古代の人物」で「王の敵」であり、山に雷を落とし、人々を焼き殺す想像上の人物に過ぎないと断言し、この言葉によってヴィテリウスはエリヤを単に空想上の産物だとして片付ける。その後もプランが進むにつれ、フィネの役割は重要さを増し、f° 719r では、ヴィテリウスはヘロドには質問するが、そのあとあえてフィネには説明を求めない。だがフィネは自発的にほぼ同様の内容を詳しく付け加える。さらに f° 717r になると、ヴィテリウスはもはやヘロドには聞こうともせず、最初からフィネに尋ねるのである。

ヴィテリウスのこの質問は最終稿では完全に消去されてしまうが、その理由はプラン f° 716r での次の質問を強調するためだと推測される—
«<Vitellius se fait expliquer ↑ *par l'interprète* ce qu'est le Messie>». 『ヘロディアス』の中では

「メシア」は当然重要な意味を持っている。キリスト自身はコントには登場しないし、まだその存在が噂されるにすぎないが、この時代はキリスト教の誕生という宗教上の大転換の時期なのだ。なにより、エリヤはメシアの出現を預言する者であることから、ヴィテリウスがエリヤについての質問をやめ、メシアについて聞くというエピソードはさらにキリスト教の本質に近づくものだと考えられる。

そして草稿 f° 624r に見られるように、メシアとは何かという質問に答えるのは、やはりフィネなのだ—

L'interprète Phinée, qqe soit syrien de naissance, eut peine à expliquer || p. Vitellius ce que ~~c'était que~~ ↑ *voulait dire s/ce mot-là*.

~~Par suite de ses malheurs, une croyance s'était~~ ⊆ *graduelmt développée chez* ↑ ~~les juifs~~ || ~~et q c'est que Dieu ne les abandonnerait pas~~ — il ne c'est qu'il viendrait || un Libérateur, qui ↑ ~~doit établir~~ un g^d sabat ⊆ *un règne de mille ans où ils jouiraient α seraient* || les maîtres. ~~pendant mille ans. Il en viendrait même deux~~ ↑ ~~Des docteurs pensaient~~ ↓ *des docteurs pensaient* ⊆ *certains même prétendent* qu'il en viendrait || deux. l'un ~~fil~~ ⊆ *sorti d'Ephraïm qui devait* ↑ *doit combattre Gog α Magog, deux* || ~~démons~~ ⊆ *lesquels sont deux géants du Nord mais* ⊆ *sera vaincu par eux – α l'autre fils de David* || qui ~~devait~~ ↑ *doit abattre le Prince du Mal.* » - ⊆ *il ajoute que Cette croyance s'était* ⊆ *est commune α se* ↑ *s'est* ⊆ *développée* || en raison inverse de la détresse nationale ↑ ~~L'espoir devenant une certitude une impatience~~ ↓ ~~convaincus que~~ Dieu ne les abandonnerait || ~~pas, tiendrait le pacte~~ — ~~établi~~ ↑ *l'alliance* ⊆ *conclue* entre lui α son peuple. Ils en étaient ⊆ *sont* || ~~convaincus. α admettaient~~ l'attendaient à chaque instant ~~Le Messie~~

Vitellius hausse les épaules .

フィネはメシアについて説明することに苦勞す

るが、繰り返し主張しているのは、ユダヤ人にとって、メシアは神が彼らを見捨てたのではないことを信じるための存在だと言っている点である。また、引用の中ほどに付加された《*il ajoute*》という言葉は、上記の主張が彼自身のユダヤ人に対する考えだという印象を与える。『ヘロディアス』の中では、他の饗宴に参加している様々な民族は、メシアについて否定するにせよ肯定するにせよ畏怖の念を抱いている。その中で、メシアという思想はユダヤ人達の苦難とともに育っていったのだという考えは、非常に理性的、中立的に見える。さらに、その説明を聞いて馬鹿げたことだと肩をそびやかすヴィテリウスの態度は、明らかに外部からユダヤを眺める客観的判断の象徴だと言えるであろう。実際、この原型となる文章は、フローベールが19世紀の神学者ミシェル・ニコラスの著述を読みながらメモした推測される f° 707r の《*Les croyances messianiques s'accroissent en raison inverse de la détresse nationale Dieu a promis de sauver son peuple. il le fera c'est une conviction enracinée. [...]* Nicolas. Bible. (437 438-39)》という文章と似通っているのである²⁵。

だが、このようなフィネの主張も最終稿では以下のように変わる—

— 《*Vous ne savez donc pas que c'est le Messie?*》

*Tous les prêtres se regardèrent; et Vitellius demanda l'explication du mot. Son interprète fût une minute avant de répondre. Ils appelaient ainsi un libérateur qui leur apporterait la jouissance de tous les biens et la domination de tous les peuples. Quelques-uns même soutenaient qu'il fallait compter sur deux. Le premier serait vaincu par Gog et Magog, des démons du Nord; mais l'autre exterminerait le Prince du Mal ; et, depuis des siècles, ils l'attendaient à chaque minute.*²⁶

ここでは、もはやフィネは自分の考えを一切語ることはない。彼が語るメシアについての定義は『旧約聖書』の「エゼキエル書」や『新約聖

書』の「マタイによる福音書」や「マルコによる福音書」の中で述べられている内容の要約となっており²⁷、彼はそれをそのまま感情を込めずに語るのである。

このことから、結局最終的にはフィネは、完全にヨカナンと同様に『聖書』の言葉を伝える役割を担うことになったと言えるだろう。そして、フィネの返答に対するヴィテリウスの反応も、すべて消去されているのは示唆的である。このように自分と敵対するユダヤの宗教について無言を貫くヴィテリウスは、結果的にフィネに『聖書』の言葉をそのまま伝えさせる、つまり当時の宗教問題を明確にする提示する役割を果たすに至ったと言えないだろうか。

5. 終わりに

フローベールは書簡で『ヘロディアス』執筆の際「民族の問題がすべてを支配していました」²⁸と語り、また「私は『ヘロディアス』のためのノートを取り終え、プランを練っているところです。フランスの読者のために色々な説明をつけなくてはいけないという、難しい作品を始めてしまったので。複雑極まる要素を取り入れながら、わかりやすく、しかも生き生きと見せるのは、非常に困難なことです」とツルゲーネフに述べている²⁹。それを考慮すると、プランの初期段階 f° 715r で書かれた、次の文章は無視できないであろう— 《*deux courants de conversation vont crescendo, l'un mystique l'autre politique*》。当時のガリラヤを取り巻く問題は、政治及び神秘主義的、いわば宗教問題、換言すれば、ローマ帝国の支配とキリスト教の誕生に集約されていたと言っても過言ではない。最初は様々な要素をあわせ持つ複合的人物として描かれていたヴィテリウスが、草稿を経るにつれ、単純化され、次いでその複雑さの方は、シゼンナとフィネという分身達に分配されていったのは、書簡の言葉からしても当然の成り行きであると考えられる。実際、シゼンナを通して税金という観点からの政治的側面が、フィネを通してヨカナンの言葉による宗教的側面が明確化されたと言えるだろう。

さらにシゼンナとフィネという創造上の人物達の登場によって、本来は接点がなかったはずのヴィテリウスとヨカナンという史実上の人物達の関係が深まったのも無視できない。神と人間との媒介者であるヨカナンを発見し、その言葉を伝えるのは、実在の人物ヴィテリウスであるよりも、やはり媒介者としての側面を持つ創造上の人物、徴税吏や通訳でなくてはならなかったのだ。

そしてまた、そのような彼らを通して初めて、ヴィテリウスは、本来ならば存在していなかったはずの『聖書』のヨカナンの斬首の場に存在することが不自然ではなくなったのである。このようにヴィテリウスとその分身達の登場こそが、当時の歴史上の複雑な要素を我々読者に「わかりやすく、いきいきと」伝えることを可能にし、かつ『聖書』のエピソードを19世紀的な「民族の問題」として捉えることを可能にしたことを考慮すると、ヴィテリウスもまた古代と近代の媒介者として『ヘロディアス』において必要不可欠の人物であったというのは言い過ぎであろうか。

註

1. Gustave Flaubert, *Trois contes*. Introduction et notes par Pierre-Marc De Biasi, Paris : Le Livre de Poche, coll. « Classique », 1999.
2. フローベールは1876年8月17日に『純な心』を書き上げ、8月23日に姪のカロリーヌへ次のような手紙を送っている— « Elle (la table) est maintenant couverte de livres relatifs à *Hérodiad* et, ce soir, j'ai commencé mes lectures » (Gustave Flaubert, *Correspondance V (janvier 1876 - mai 1880)*. Édition présentée, établie, et annotée par Jean Bruneau et Yvan Leclerc, avec la collaboration de Jean-François Delesalle, Jean-Benoît Guinot et Joëlle Robert, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2007, pp. 103-104)。また、10月28日には、ツルゲーネフに« Mes notes pour *Hérodiad*, sont prises. Et je travaille mon plan » (*Ibid.*, p. 127) と語っている。なお訳出にあたっては、
 3. Voir Raymonde Debray-Genette, « Les débauches apographiques de Flaubert (l'avant-texte documentaire du festin d'*Hérodiad*) » in *Romans d'archives*, Presses Universitaires de Lille, 1987, pp. 39-77. ドウブレ=ジュネットはフローベールの資料を詳細に調べ、彼が『ヘロディアス』の「饗宴」の場面に、資料のどの部分をコピーしたかを分析し、その過剰な情報が作品に詩的要素を付加し、劇的で絵画的な調和を生み出したと語っている。
 4. Voir Cécile Matthey, « Fertilité de la pierre dans *Hérodiad* de Flaubert », *Romantisme*, N°127, 2005, pp. 79-88. マテは人物や風景の中に石化のイメージが頻繁に現れることから、『ヘロディアス』はキリスト教の誕生ではなく、神々の死、つまり古代の宗教の移行に重点が置かれていると考察している。
 5. 読書ノート、プラン、草稿に関しては、必要な個所にはボナコルソ校訂批評版を用い、パリ国立図書館の草稿の番号を付した (Voir Giovanni Bonaccorso et Collaborateurs, *Corpus Flaubertianum. II. Hérodiad. Édition diplomatique et génétique des manuscrits. Tome I*, Paris : Nizet, 1991, et *Corpus Flaubertianum. II. Hérodiad. Édition diplomatique et génétique des manuscrits. Tome II*, Sicania, 1995)。なお、草稿内の記号はつぎのことを意味する—
 - italique : variantes interlinéaires
 - ↑ : variantes en interligne supérieur, 1^{ère} campagne
 - ↑ : variantes en interligne supérieur, 2^{ème} campagne
 - ↑ : variantes en interligne supérieur, 3^{ème} campagne
 - ↑ : variantes en interligne supérieur, 4^{ème} campagne
 - ↓ : variantes en interligne inférieur, 1^{ère} campagne

- ⌞ : variantes en interligne inférieur, 2^{ème} campagne
 ⌟ : variantes en interligne inférieur, 3^{ème} campagne
 ← : ce qui précède le cran est en marge
 <...> : rature
 [] : crochets de Flaubert et de l'éditeur
 | | : barres de Flaubert
 || : fin de ligne
6. Flaubert, *Trois contes*, op. cit., p. 131.
 7. Flavius Josèphe, *Antiquités judaïques*. Traduction de Julien Weill, sous la direction de Théodore Reinach, Membre de l'Institut, Paris: Ernest Leroux, éditeur, 1900, Livres XVIII, V, 2-119. なお訳出にあたっては、『ユダヤ古代誌6』（秦剛平訳）、筑摩書房、「筑摩学芸文庫」、2000年を参照した。
 8. Gustave Flaubert, *Carnets de Travail*. Édition critique et génétique établie par Pierre-Marc de Biasi, Balland, 1988, p. 638.
 9. Voir Tacitus, *Annales*. Texte présenté, traduit et annoté par Pierre Grimal, Gallimard, Paris : « Folio classique », 1990, Livres VI, chapitre XXXI~XXXVII, pp. 227-232.
 10. Flaubert, *Trois contes*, op. cit., p. 143.
 11. f° 554rでは« *jeune homme de/environ 15 ans* »と書かれている。Voir Suétone, *Vies des douze Césars*. Préface de Marcel Benabou, traduction et notes de Henri Ailloud, Gallimard, Paris : « Folio classique », 1975, Livre VII : Galba, Othon, Vitellius, Vitellius III, p. 378. スエトニウスによればアウルス・ヴィテリウスは15年9月24日、あるいは9月7日に誕生している。
 12. Flaubert, *Trois contes*, op. cit., p. 169.
 13. Voir Suétone, *Vies des douze Césars*, op. cit., Livre VII : Galba, Othon, Vitellius, Vitellius III, p. 379.
 14. Flaubert, *Trois contes*, op. cit., p. 145.
 15. *Ibid.*, p. 149.
 16. 同様の描写は f° 613r, f° 611r, f° 690v にも見られる。
 17. Flaubert, *Trois contes*, op. cit., pp. 151-152.
 18. スエトニウスは「確かに彼（プヴリウス・ヴィテリウス）はローマ騎士であり、アウグストゥスの財産を管理した元首属吏であった」と記している (voir Suétone, *Vies des douze Césars*, op. cit., Livre VII : Galba, Othon, Vitellius, Vitellius III, p. 377)。
 19. Voir Tacitus, *Annales*, op. cit., Livres VI, chapitre XLI, p.234.
 20. 特にティベリウスの属州からの取り立ては厳しかった—「ティベリウスはガリア、ヒスパニア、シリア、ギリシャの王達から財産を没収した。それは、あまりに馬鹿馬鹿しい、あまりに恥知らずな冤罪で、ある者は財産の一部を現金で所有しているという以外に、何も非難できなかったほどである。沢山の町や個人が、公的な奉仕免除の特権や、鉱山の採掘権や、間接税の徴収権を取り上げられた」 (voir Suétone, *Vies des douze Césars*, op. cit., Livre III, :Tibère, XLIX, p. 198)。
 21. 『聖書』の「エゼキエル書」38,39章や「ヨハネの黙示録」22章を参照。
 22. Flaubert, *Trois contes*, op. cit., p. 157.
 23. Voir William Beckford, *Vathek*. Réimprimé sur l'édition française originale avec préface par Stéphane Mallarmé : l'Auteur, 1876. 『ヘロディアス』執筆中の1876年6月半ばに、フローベールはマラルメから『ヴァテック』を贈られているが、この奇妙な小説の中で、主人公バテックは恋人と地下の火の宮殿に入る。フローベールが、この場面に興味を持ったであろうことは想像に難くない。
 24. Flaubert, *Trois contes*, op. cit., p. 155.
 25. Voir Michel Nicolas, *Des Doctrines religieuses des Juifs pendant les deux siècles antérieurs à l'ère chrétienne*, Michel Lévy, 1860.ジゼル・セザンジェは、f° 680rでメシアニズムとその対立、f° 707rでメシアニズムとナショナリズムについて、フローベールがニコラの著作からメモを取っていることを指摘している (voir Gisèle Séginger, « L'écriture du politique dans *Hérodias* », *Revue Flaubert [en ligne]*, 5, *Flaubert et la politique*, numéro dirigé par Dolf

Oelher, 2005)。

26. Flaubert, *Trois contes*, op. cit., pp. 163-164.
27. ゴグとマゴグは「エゼキエル書」38、39章や「ヨハネ黙示録」20章8に記されているように、悪魔たちに味方し、反メシア、キリストの反勢力だと考えられていた。また、メシアとされたキリストがダビデの子であるという記述は「マタイによる福音書」の1章1に記されている。
28. Flaubert, *Correspondance V.* op. cit., p. 58 (1876年6月19日、ロジェ・デ・ジュネット夫人宛て)。
29. *Ibid.*, p. 127. フローベールはこの点について苦心していたらしく、同様の文章をモーパッサンにも送っている—「この作品で、難しいのは、必要不可欠な説明を、できる限り、なしですませなくてはいけないことです」(*Ibid.*, p.126. 1876年10月25日)。